

影響研究に対する提言

——春琴抄をめぐる——

大 島 正

第二次世界大戦が終ってから、三年目の一九四八年五月に、日本比較文学会は創立された。間もなくこの学会は研究の方法論をめぐる、ある種の混乱を来したように思う。しかし、外国文学と日本文学との交流関係すなわち相互の影響の問題が中心として論ぜられ、それなりの成果をあげてきた。

初期の段階においては、日本の比較文学者の中には、かれらの力によって日本文学史を書き改めるべきであると高言するというのもあったせいか、比較文学に対する風当りはかなりきつかった。

学会創立後一〇年目の一九五八年（昭和三三年）四月一日に発行された、学会誌『比較文学』第一巻には、会長中島健蔵が「影響の測定」と題する巻頭論文を、太田三郎が「芥川竜之介と外国作家の関係」を資料として発表した。両者とも文学的影響の研究は、あくまでも実証的に行われねばならぬとして、外国作家に関する文献表を精細に作成すべきことに重点を置いた。中島論文はその理論であり、太田資料はその実践であった。

学会誌の創刊号にこのような方向性が打ち出されたかにみえたことに対して、陰に陽に批判がなされた。

ある作家の作品中にあらわれる外国作家名の頻度数を頼りに、その作家に外国作家の影響がいかにあつたかを論ずる手がかりにするというのは、一見はなほだ明解に思われるのであるが、作家によっては自分が最も感銘を受けた外国作家の名をあらわさぬことがあるかもしれない。そのような場合はいったいどうするかということのほうが、むしろ問題ではないかなどという批判がでてきた。

あえていうならば、この中島、太田理論は大根をよく切れる庖丁ですばすば切るような感じであつた。すうっと頭に入りはするが、あれつとまわりを見直さねばならぬ一種の不安感が残つた。

たしかにこのような理論を金科玉条の如く信奉する限りこと、はやり易い。しかし、文学研究という霞をつかむが如き作業には、割り切れる論理や理論ではまに合わないこともある。

そのことを真つ先に著書によって警告した学者は矢野峰人博士であつた。その著書『新・文学概論（一九六一年—昭和三六年—六月六日）』に述べられた次の意見は、このような傾向に対する、まさに頂門の一針であつたように思う。

「……われわれの警戒せねばならないのは最も重要な、今日ではまだ科学的に実証し得ない境地の消息に接する事を忘れて、科学的ならん事を志すのあまり、われにもあらず、形式のみ科学的に見える邪路に迷い入る事の無いようにする事である。

作品其物とは無関係にその作者の名が新聞や雑誌に出たり、或は其人の他の作品の梗概が紹介される事があつても、その故に其作家や作品が、紹介国の文学に影響を与えた事の証拠にはならない。或る作家の名が定期刊行物に現われたり、其人の作品が紹介されたという事は、確たる事実ではある。然し、それは、紹介国の文学と直ちに結

びつくとはい限らない。この事はそれ以上のもの、即ち翻訳や研究論文の出現の場合についても言い得るのである。

(中略) 翻訳の歓迎は、読書界に於て見られる現象で、むしろ数量の問題であるが、影響の有無は創作の世界に限られた現象で、むしろ質的な問題である。」

私の体験からみて、比較文学という影響とは次の四つの型に分類できると思う。

(一) ある国文学の伝統を縦軸とすると、この縦軸に外国文学ないし文化が横軸として流入し、両軸の交点において新しい作品が成立する。

(二) 影響とは化学方程式の如きものである。たとえば $H_2 + O_2 \rightleftharpoons H_2O$ の如き方程式を考えてみるがよい。化合物としてのある作品は、深い研究をまっけて、真の影響関係が察知できる。

(三) 光が水面から水中に入るときは、水面に近く屈折するように外来の文学、文化の影響は屈折、つまり一種のひずみである。

(四) コップの水中にインクを垂らせば必ず何かの紋様を生ずる。このような影響は明らかに模倣であるが、模倣も一種の影響と見なすべきである。

ここに述べた(一)から(四)までは文学的影響を判り易く説明するための比喩である。ある国の作家Aの作品A'に、ある外国の作家Bの作品B'が影響を与えたという場合、前述の比喩による説明は、極めて説得力がある。しかし、それは比喩的な解説に終ってしまふ場合もあって、中々思うようにはいかないものである。文学的影響の研究とは一言にして言えば魂の軌跡の追跡のようなものであるから、割り切れる論理だけでは案外処理できないものなのだ。

そこでもうすこし具体的に論をすすめてみたい。谷崎潤一郎の『春琴抄』はトーマス・ハーディの『グリープ家の

『バアバラ』(Thomas Hardy: Barbara of the House of Grebe) の影響を受けたと言われている作品である。

谷崎は芥川竜之介に比べると、外国作家の影響の有無を論じ難い作家である。かつて、日本比較文学会主催の公開講演会(一九五七年一月三日、大阪・朝日新聞社講堂)で今東光が「作家と比較文学」と題して講演した。このとき、彼は谷崎を自分の師であると言い、谷崎は日ごろ何を讀んでいるのかさっぱり判らない。ところが他人が滅多に讀まないと考えられる経文まで讀んでいて、明解な解説ができたりするので、その底が知れないと語っていた。この講演をまつまでもなく、谷崎の読書範囲は広く、彼の作品に対する外国文学の影響は軽々に論ぜられない。『春琴抄』などは恐らく例外なのであろう。私がこの作品とハーディとの影響関係を最初に聞いたのは、太田三郎の講演であった。この講演は十数年前に同志社女子大学において主として英文科の女子学生に対してなされたものであった。たまたま私は同学の先輩の講演ということで、これを拝聴したわけである。「谷崎とハーディ」の関係は、それよりはるか以前に佐藤春夫によって、指摘されているから、太田一個人の新発見ではない。しかし、私は佐藤のこの指摘をずっと後に知ったのであるから、そのときの太田三郎の講演は耳新しく、極めて新鮮な感じであった。トーマス・ハーディという英国の作家は、私のように戦前の中学校を経験した者には、まことに懐しい作家なのである。英語の教科書にも『テス』(Tess)の断片が採録されていて、英語の教師からハーディについて簡単な説明を聞かされたりした。

ところで、ハーディが日本に紹介されたのは、一八九〇年(明治二三年)でハーディはすでに五〇才、かの地において文名の高い作家であった。日本ではこのころから、すこしづつ翻訳や紹介がなされ、大正時代になるといくらか目立つようになってきた。

そして、一九二四年ごろから三年ばかり(大正一三―一五年)、ようやくハーデイが盛んに読まれ、研究される。さらに、一九二八年(昭和三年)にハーデイの死が日本に報せられると彼の作品の研究、評論がまた急激におこる。ただし、この一九二八年以後の急激な上昇現象は、英文学研究が中心であって、多くの作家が争ってハーデイの作品を原文ないし翻訳を通じて読むということはなかったらしい。

ハーデイの作品の日本語訳は一九二八年以後も引続き出版され、第二次大戦後も割合多く翻訳がでている。彼の作品の需要は主として、研究が中心であるということを忘れてはならない。

以上は日本におけるハーデイの資料的紹介である。そのほか、一九五八年(昭和二十一年)には、日本におけるハーデイ研究者によって、ハーデイ協会なる学会まで創立されていることを付け加えておかねばならない。

さて、谷崎はハーデイ死去の一年前、一九二七年(昭和二年)に、『グリーンブ家のバアバラの話』を『中央公論』—作家の翻訳号、歳末特別号—十二月一日発行(第四二年第一二四号第四七九号)に発表した。この号は作家の翻訳特別号であったので、佐藤春夫、正宗白鳥、山本有三らも翻訳を発表した。

谷崎が翻訳したのは『貴婦人群像』(A Group of Noble Dames)の中の第二話(Dame the Second)にあたる作品であった。彼はこの翻訳に次のような前書を付けている。

ハーデイ翁の小説に“A Group^{ky} of Noble Dames”と云ふのがある。翁がしばしば題材とする英国のWessex地方の物語で、古い貴族の家に伝はる昔話が集めてある。話はすべて十篇から成り、土地の古老どもが集まつて、一人が一つづつ語る体裁になつてゐる。此処に訳出したのは其の第二の挿話、“Barbara of the House of Grebe”

で、本文中に「私」とあるは、これを語つてゐる男、村の年老いた外科医である。

私は語学に自身がなく、翻訳に馴れてゐないので、出来上つたものを読み返して見ると、少しギコチない所があり、我ながら飽き足らぬふしが多い。折よく旧友辻潤君が遊びに来たので、二三箇所同君にも相談したが、勿論間違ひもあるであらう。記して原作者たる翁に謝し、併せて読者の寛恕を願ふ次第である。(傍点は筆者)

この前書には谷崎がハーデイのこの作品をいかにして読んだか、また興味などについては全く言及がなく、いたずらに誤訳だけを恐れる気持だけがうかがわれるにすぎない。

おまけに傍点の部分は後に「折よく旧友辻潤君や沢田卓爾君が遊びに来たのを掴まへて、同君たちにも教へを乞うたが……」と書き改められているほどである。

谷崎が前書きしているように『貴婦人群像』は『デカメロン』(Decameron) のような形式をもっていて、一〇人の話者が一人ずつ一貴婦人の話をしていくという趣向のものである。ただし、八篇は一八八九年から九〇年にかけて雑誌に発表されたもので、さらに二篇を加えて一八九一年に出版された。

谷崎がどのような版⁽¹⁾で、いつごろからこの作品を読みはじめたかは、明らかになし得ないのだが、この翻訳を發表した一九二七年ごろはもはや、ハーデイ・ブームではなかつた。翻訳をして世間に問うというのは、その作品が感銘を与えた証拠であろう。また、翻訳すればある作品を最も精密に読む結果となり、外国文を日本語に直していくうちに、文体とか思想にまで影響を受けることがある。ここで谷崎の翻訳態度について語らねばならない。いかなる文章といえども、書出しというものは重要である。

これを読んではじめにひっかかるものがあると、もういけなくなる。

谷崎訳の書出しは次のようである。

「アプランドタワース卿が彼女をわがものにしようと思ふ決心をするに至つたのは、それは情熱からではなく、明かに一つの意趣からでした。彼がその意趣を抱いたのはいつであるか、或ひはいつから、見す見す嫌はれてゐることが分つてゐながら大丈夫物になると云ふ確信を得たかは、誰も知つてゐる者はありません。……」

It was apparently an idea, rather than a passion, that inspired Lord Uplandtowers' resolve to win her. Nobody ever knew when he formed it, or whence he got his assurance of success in the face of her manifest dislike of him.

原文と谷崎訳とを比較してみると、まことにそのない、受験生用英文解釈の模範答案の如きで、*きばえ*？ である。ことに「意趣」という訳語は *an idea* に対するものであるが、どことなくこちない感じではないだろうか。私どもが意趣という単語を用いる場合は、意趣返し、つまり恨みをかえすこと、復讐という意味に用いることが多い。原文の *an idea* は考えとか意向という意味であろうから、第一義的には復讐を意味する「意趣」と翻訳しなくてもよいのではないか。いますこし工夫がほしいものである。

恐らくこれが翻訳でなかったら谷崎はこのようなきこちない文章を書かなかつたであろう。*an idea* と *a passion*

がむしろ対語的に用いられているところから「情熱からではなく、明かに一つの意趣からでした」などと翻訳してしまつたのであろう。だが、どことなく齒切れの悪いものになっている。これをもうすこし私なりに説明すると、アップランドタワーズ卿が女（後に彼の夫人となるバーバラのこと）を獲得しようと心にきめたのは、若々しい情熱がそうさせたのではなく、世間智にたけた彼がいろいろ周囲の状況を考えたあげくの一つの分別 (an idea) からであつた、という意味なのである。ハーディの英文をこなれた日本文に移しかえるには、思いきつた意識が必要であらうが、そうするとあの対語的用法の面白味を失うことになりかねない。

そこで谷崎は分別なんぞという単語よりも意趣のほうを選択したと考えられるが、谷崎にしてはすっきりしない文章になつたのだと思う。

概して翻訳文というものは、原文の味わいを出そうとすればするほど、それに引きずられ、翻訳者が本来もつていゝる筆力を下廻る程度でしか表現できないものである。

谷崎のこの翻訳はつくづくそのように考えざるを得ない好材料である。とはいつても、実にうまいと思えるところもある。次にその例を一つあげておくことにする。

それから暫くひっそりとして、広間の柱時計の響きが妙に際立つて聞えました。彼はちよつと横を向いて、仮面を外しにかかつたのです。彼女は息もつかないで待つてゐましたが、それは面倒な仕掛けになつてゐるらしく、幾らか手間がかかりました。彼女はちらりと彼の方へ眼を向けたり、直ぐその顔を背けたりしました。さうして、それが取り除けられると、彼女はそこに現はれた惨憺たる物の形に眼を閉ぢました。一瞬間、総毛立つ感じが彼女の全

身を走りました。が、それでも彼女は、土気色になった唇から自然に発する叫び声をぐっと抑へて、改めて彼を見直すために無理にも心を引き立てましたが、もう一刻も我慢が出来ずに、椅子の傍へばったり倒れて、眼を蔽うてしまひました。

In the pause which followed, the ticking of the clock in the hall seemed to grow loud; and he turned a little aside to remove the mask. She breathlessly awaited the operation, which was one of some tediousness, watching him one moment, averting her face the next; and when it was done she shut her eyes at the hideous spectacle that was revealed. A quick spasm of horror had passed through her; but though she quailed she forced herself to regard him anew, repressing the cry that would naturally have escaped from her ashy lips. Unable to look at him longer, Barbara sank down on the floor beside her chair, covering her eyes.

ここにあげた文章はほぼ半ばごろにでてくるのだが、訳文は書出しの部分に比べるとずっとこなれているし、無駄のない、いい文章である。in the pause which followedを「それから暫くひっそりとして」と翻訳しているが、これなどは pause の感じがよへどいつらると思ふ。She braethlessly awaited the operation, which was one of some tediousness. この英文はどちらかというところと翻訳がぎこちなくなり易いと思うのだが、面倒な仕掛けになっているらしく、というような説明的句を挿入することによって情景を活写しているのも面白いし、which をうまくすり抜けて

いる手並みはさすがである。また *unable to look at him longer* を「もう一刻も我慢が出来ずに」と訳しているところは、それ以上長く見ていることが出来なくて、と直訳してもとおるのだが、やはり谷崎訳のほうが遙かに緊迫感がある。このような平板な個所にも、よく目がとどいていることが知られる。

このように詳細にみていくと、出来不出来の個所が見えてくるのだが、翻訳として失敗とはいえないまでも、谷崎の筆力を十分に活かしてきっているかどうかはいささか疑問である。前述したように原文の味を出そうと苦心する余りにまたは原文に引きずられてぎこちなくなるというのは、翻訳という作業について廻る業（ごう）の如きものであり、翻訳者の筆力を一〇〇とすると、翻訳文ではせいぜい八〇程度にしか発揮できないものである。

さて、谷崎はハーディの『グリーンバ家のバアバラの話』を翻訳し発表してから六年後の一九三三年（昭和八年）の『中央公論』六月号に『春琴抄』を発表した。いったんこれが世に出ると、谷崎潤一郎流の古典的味わいのある作品の中の傑作として好評を得た。

そして、その翌年一九三四年（昭和九年）の『文芸春秋』新年号に「最近の谷崎潤一郎を論ず—春琴抄を中心として—」という評論を佐藤春夫が発表し、この中でまことに興味深い事実を述べ、『春琴抄』を賞讃した。

春琴抄が彼の近作のなかでもやはり結局最も傑出してゐるからこれを代表作と呼ぶのが至当と感ぜられて来た

……その理由は何れ行を逐うて徐ろに明瞭にならう—いや明瞭にしようといふのがこの一文の目的に外ならない。

……「芦刈」は所詮名作ではあつても「春琴抄」の堂々傑作の風格には及ばないものがある。……

ともあれ僕自身の見界を以てすれば春琴抄は世評の如何にはかかはらず作者会心の作には相違なかるべく、すべ

ての会心の作が必ずさうである如く、この作もこの遅筆で悩んでゐる作者としては比較的筆路の渋滞なくすらすらと書き上げ得たものではないだらうか。この点を見る参考にもならうかと稿本春琴抄が笹沼氏の蔵に帰してゐると知つて、その秘蔵を借覧し得た。全篇百三十七枚——最後の一葉は六七行の空白を残してゐるものである——どの一葉を見ても多くは二三字時には四五行位つづいてとどころに消しのないのは一枚もなく消しは他人に吟味されるのを嫌ふかの如く墨黒々とべつたり塗りつぶされてはゐるが、多くは書きそこなひや無駄の消しらしく果して苦渋の痕のやうなものは見当らぬ。試みに原稿でもう一度読んでみると、ところどころに小学生の文字のやうな稚拙なに出会すのも興があつた。その文章は地唄をうたう時の彼の少しだみ太いしづかない声——それは某君が春雨の日のやうに静かな朗らかにさびた趣と形容したもの——を僕に思ひ出させた。尤も活字で読むとそんな味まではわからぬ、ここらが稿本の味なのであらう。

思ひ出させたといへば稿本によつて再読して行から行へ面白さが加はり最後の一句を最も面白く読み終へて、その余白に癸酉某月某日と書き添へて会心の笑を洩しながら攔筆したのであらう作者の姿を想像した僕は、この作が同じ作者の筆によつて先年訳されたトーマス・ハーディの「グリーンブ家のバアバラの話」と題目も手法も一味相通ふもののあるのを感じて何か関係がありさうな気がしてならなかつた。いづれも熱愛する愛人の美貌の醜悪に変るテーマであり、あれは〔ハーディの作〕村の老人の話によつて、これは〔春琴抄〕老媪と古書によつて間接に真相が知られるばかりか、いづれも所謂心理描写といふものを排して性格のみを描写するだけのおほどかな古風な手法によつて異常な物語の異常な効果の大半を生かし得てゐるなど、これ等の相似こそよほど注目すべきもので（中略）このハーディの作と彼の新作との相似位こそ誰かひとり位指摘する人があつて然るべきだつたが、これがまだ無いとす

ればこの点だけ位でも僕の発見の功に帰するかと一友人に語つたものであつたが、その後数日偶然語り出した作者自身の言葉によつて僕の推察の的中してゐたことは明確になつたが、更に作者の説くところによると、グリーブ家のバアバラの場合——その美貌故に愛してゐた心からの愛人の美貌が變つてしまつたあの場合、日本人ならどうするだらうと仮定を進めてみたり、男と女とを取返へてみたりするうちにあんな風に出て来たといふのがその樂屋ばなしであつた。それならばあの作がその結尾で大に振ふも当然の道理でその主題のまま端的に露出してそれを人目につきやすいやうにとわざわざ最後に据ゑたわけであり、又そのなかに無言裡に反西洋的氣勢をもこめてゐるところともならう。とかう、もう一步で凶星を指しそこねた残念さのみ氣をとられた僕は、咏歎的な蘆刈抒情的な春琴抄を書くの靈感と情操とを作者に与へし佳人のありやなしやは終に聞き洩してしまつた。

すこし引用が長くなって恐縮至極であるが、重要な個所を抜書きするだけで、これだけの長さになってしまう。谷崎と親交のあつた佐藤だけに、すぐに谷崎の手の中が判つたのであろう。彼はこの稿の結尾に（八年一二月一日夜脱稿）と日付けを書いているが『春琴抄』を読んでの直観が的中したのを年末に書き得た満足のさまがよく伝わってくる。

彼はまずハーディの作品と『春琴抄』との関係をつきとめたわけだが、稿本を読んでの感想は重要で、私ども文学研究者に教えるところは大きい。

また、最後の一句を最も面白く読み終えて、と書いているのは、私には最大の関心事である。このことは後に述べたい。

ところで「グリーンブ家のバーバラ」という作品は案外、読まれていないので次にその大要を示し『春琴抄』との影響関係をみる参考に供したい。

この物語は再度書くが『貴婦人群像』の中の第二話に相当し、ある老外科医が語るという趣向になっている。ウェセックス地方 (Wessex) の名家の当主アップランドタワーズ伯爵 (Count Uplandtowers) は一〇マイルばかり離れている、ジョン・グリーンブ準男爵 (Baronet John Grebe) の娘に想いを寄せ、結婚しようと考えていた。そういうとき若い伯爵はグリーンブ家の舞踏会に招待され、同家の愛娘バーバラ (Barbara) に会う。かの女は請われるままに一度だけ伯爵と踊るが、早目に寝室に引き上げてしまう。それは見せかけであって、バーバラは美貌の恋人と駆落ちをしたのであった。

翌朝グリーンブ家では大騒ぎになり、アップランドタワーズ伯が連れ出したのではないかと疑った。ジョン・グリーンブは伯爵を訪れ、娘の所在を確かめる。バーバラの失踪を知った伯爵は、身も世もあらず失望して椅子に倒れてしまふ。

バーバラの恋人というのはショットフォード・フォラム (Shottsford-Forum) の若者で親子代々の古い硝子絵かきの職工だが、すぐれた美貌に恵まれた、エドモンド・ウィロウズ (Edmond Willowses) であった。

グリーンブ家では前後処置を考えたが、下手に騒ぎ廻るのは家名を傷つけることになるとしてただ沈黙を守ることにした。

ところが、四週間も過ぎたころ、グリーンブ夫妻のもとにバーバラから駆落ちの許しを請う手紙が届けられた。夫妻

はもちろん二人を許す気でいたが、もう一つグリーンブ家にとっては都合のいい情報もたらされた。

平民ウィロローズの先祖は零落した貴族の末孫とかつて結婚したことがあるというのである。それで直ちにバーバラ宛に「ウィロローズとの結婚を許すことと二人を歓迎する」旨の手紙が送られた。

三、四日すると若い二人は見すばらしい駅馬車で帰ってきた。若いウィロローズは慎しやかに控えていたが、その美貌に母のグリーンブ夫人も「なんと美しい！ バーバラが夢中になるのも無理はない」と、思ったほどであった。

父の準男爵グリーンブは別のことを考えた。この美貌の娘婿が名門の家族の一人として恥しからぬ教養を身につけるべく、家庭教師の指導のもとに一年間欧州各地を旅行させることにした。彼は旅行先から手紙をバーバラ宛に書いたが、その昔は職工だったとは思えぬくらい、次第に教養を高めていくのが、文面から知られた。

ところが好事魔多しとか、ヴェニスで謝肉祭の夜、観劇中に火災にあい、ウィロローズは勇敢にも燃えさかる火の中から人々を助け出した。だが、五度目に火災の中に飛び込んだとき焼け落ちる梁の下になり、頻死の火傷をうけた。

この椿事はやがて家庭教師から、バーバラの父ジョン・グリーンブ宛に知らされてきた。目下入院中であるが奇跡的に命は取りとめそうである。数名の熟練した外科医の手術を受けているが、追って続報すると書かれてあった。

夫ウィロローズの留学がはじめの計画より二ヶ月延びてはいたが、帰国が近づいてきてから降って湧いたような不幸にバーバラは悲しみもし驚きもした。さりとて、健康状態もあまりよくないいまは、帆船でヴェニスまで渡することもどうかと思われ、夫を見舞い看護することは断念せざるを得なかった。

数週間後にウィロローズは自分で筆をとることができるようになり、負傷の程度をバーバラに知らせてきた。この手

紙によれば、どうやら片方の眼は永久に視力を失ったらしい。彼はかの女がどんなことがあるうとも心変わりしないと誓ってくれたのをありがたく思っているが、自分の変りよりの凄さは、かの女が会っても判らないくらいだ。そのことがよくのみこめていないのが気がかりであるとも書かれていた。

バーバラは彼の懊悩の陰に、いかに多くのことがらが潜んでいるかを察したが、ウィローズの気が安まるような返事をしたためた。

やがてウィローズが帰ってくるようになった。バーバラは打ち合せどおりにある旅宿に夫を迎えに行った。しかし、約束の時刻になっても夫は現われない。かの女は夫といっしょに駅馬車で帰るつもりで、自分の馬車は先へ帰ってしまった。かの女のすることはいつもこうであって、後先の分別がないのだ。

どうしようかと困っているところへ、アップランドタワーズ伯が馬車で通りかかり、かの女を三マイルも遠廻りしてまで、その館に送りとどけてくれた。その道中かの女はすべてを伯爵に打ちあけてしまったのが不思議であった。かの女が降りるとき、伯爵は「私の言うことさえ聞いていらしたら、こんなことにはならなかったでしょうに！」と非難めいた小声で言うのであった。

かの女は自分のたしなみのなさに後悔しながら、夫の帰りをユウショルトの別荘 (Yewsholt Lodge) で待っていた。すると、真夜中ごろ、不意に夫は戸口から入ってきた。彼は黒の外套を着て、帽子を目深かにかぶっていた。バーバラがほとんど恐怖さえ感じたのは肌色の仮面をつけていることだった。

気味の悪い片目の仮面ばかりか、手をとるときに見た一、二本足りない指。ただ仮面を通して片目だけが光っていた。

バーバラはすっかり怯え切ってしまった。それをみてとったウィローズは「どんな外形の変化にも動じないか」とバーバラに聞いた。かの女は「大丈夫だと思うわ、きっと」とかすかに答えただけだった。

前述の翻訳例「それから暫くひっそりとして……」はそれから後の光景である。

ウィローズは最愛の妻バーバラの様子に、失望してしまった。かの女が温室の花壇の間に潜んでいる間に一通の置手紙を残して行方をくらました。

手紙には「わが永久に愛する妻よ、このまま一年間イングランドを去っていくがもし生きておられたら再び御身にま見えよう」とあった。

かくしてウィローズの生死も判らず、その年は過ぎた。この間バーバラは貧しい者にしきりに施しをしたりして気を紛らしていた。いっぽうアップランドタワーズ伯爵はことの次第を知って、意地の悪い六十爺の如くニヤリと笑みを洩らした。そして、何かと口実をもうけてグリーンブ家に入りし、親交を深めるように努めた。すると、バーバラも次第に打ちとけて、伯爵と話をするようになったばかりか、頼りがいのある人と思うようになっていった。

そうこうするうち、音沙汰のないウィローズは外国のどこかで死亡したものと、グリーンブ家では考えるようになっていた。

そして数年後にはアップランドタワーズ伯爵はバーバラとの結婚にまでこぎつけた。伯爵は結婚前はかの女の本当の愛を得ていなくても、あまり気にかけない様子であったが、結婚後しばらくすると世継ぎの子供をもうけられないのは、かの女が冷淡であるからだといって責めるようになっていた。

こうした佻びしい日を送っているアップランドタワーズ夫人のバーバラのもとにイタリアから一通の手紙が届けら

れた。しかも表書きには「ウィロローズ夫人殿」とあった。それはピサの彫刻家からの手紙で、ウィロローズから等身大の大理石像を依頼されて、像はでき上がっていること、残金支払いの請求と像の届先をきいてきたものだった。

バーバラはひとまず残金を支払い、大理石の像は伯爵家に届けさせることにした。この像が着くまでの数週間間に、ウィロローズの親戚から簡単な彼の死亡通知状が送られてきた。それによればウィロローズがバーバラのもとを飛び出してから約六ヶ月後に彼は亡くなっていた。すでに数年前に海外で死んでいたことになる。

彼の死亡を知ったバーバラの哀傷は、やがて故人の不幸に対する心からの憐愍となり、自分が薄情だったことを自ら責める念となった。そして、大理石の像は数日後にかの女のもとに届いた。

荷を解いてみると、美貌のウィロローズの生前の姿に生き写しの等身大の身事なカルラ大理石像がでてきた。

これを見てさすがに伯爵も、アポロ神の生き写し、妻が一時迷ったのも無理がないと嘆声を発したほどであった。バーバラはこの彫像を自室に運ばせ、あらたに作った戸棚にしまいこみ、鍵をかけておいた。

ある夜明けに、伯爵は妻が自分の傍に寝ていないことに気づいた。はじめのうちにはさして気にもとめなかったが、夜中頻繁に寝室を抜け出すのに不審を抱き、ある真夜中に彼はこっそり妻の後をつけた。

かの女の私室では不思議な光景が展開した。バーバラは例の戸棚をあけた。そこには妖しくも灯火にうつし出された、あの等身大の彫像が見えた。そればかりか、かの女の寝間着の上の肩掛けはしどけなく垂れ下がり、生ける人に対すると同じように、ウィロローズの像をかき抱き、接吻し、纏綿たる睦言をささやきながら、身をよじらせているではないか。

伯爵はこの狂態をみて嫉妬の炎をもやしたが、冷静にわが胸を抑えつつ寝室に戻った。彼はまことに残酷な一計を

案じたのである。かつてウィローズと旅行をともした家庭教師を探しあて、不慮の災難のことを聞きだし、火傷によつて変り果てたウィローズの顔の写生図まで書かせた。それは鼻も耳もない化物の相でしかなかった。

伯爵はこの図を手に入れると機会を待った。やがて、バーバラが一週間ほど実家へ泊りがけで出かけた留守に伯爵は、看板かきと機械工を兼ねた者に命じて、例の大理石をあの図の顔とそっくりに傷つけ、色彩までほどこさせた。悪魔の如き破壊は六時間もかかってなされた。

さて、バーバラが帰宅した夜、伯爵は嗜虐的な期待をもつて寝たふりをしていた。かの女は夢の中でウィローズと睦みあい、やがて目をさまして、いつもの部屋へとすべるように入つていった。

やがて鍵をまわす音がしたかと思うと、悲鳴につづいて重い物体がどたん倒れる音がした。

伯爵は弾ね起きてかけつけ、失神した妻を抱きかかえて、寝室に戻り寝かせた。妻がようやく正気づく、これでもまだあの男を愛するのかと問いただした。かの女はわななきながら、いやです、いやですと答えるのであった。

それでもまだ伯爵は手荒な矯正手段をゆるめようとはしなかった。翌日になると、あの凄惨な彫像を、かれらの寝台近くに置き、夜ごとバーバラに見せつけた。

哀れなバーバラは夫の命ずるままに夜具の隙間から眺めては、身をふるわし、顔をかくす。このような責め折檻に、バーバラはすっかり神経を参らせてしまった。

三日目の晩にはついにかの女はてんかんの発作を起こしたほどであった。そのとき伯爵にも彼らしい愛が忽然と燃え上がった。バーバラは正気に戻ると、はじめて夫に取りついていじらしくも幾度も接吻し激しく泣き出した。そして「あなたを愛します」というのであった。

こういうことがあってからは、かの女も夫の伯爵を愛するようになったが、夫の女友だちにもはげしい嫉妬を示すようにもなってしまった。

さてこの失意の貴婦人の生涯は、意地の悪い冷酷な夫の色欲の道具になり果てたようであった。かの女は八年間に一人の子供を産んだが、半数は早産であったり、生後すぐ亡くなったりで、女の子が一人だけ成長した。

その後バーバラは保養のためイタリアへ赴いたが、数ヶ月後にフロレンスで亡くなった。予期に反してアップランドタワーズ伯爵は再婚せず、彼が死去すると爵位は甥の手に渡った。

やや冗漫のきらいがあるかもしれないが、以上が「グリーンブ家のバーバラの話」の梗概である。

実はこの物語には、二つの蛇足ともいえそうなことがらが付け加えられている。これは『春琴抄』との関係を考えてみるときに見逃せないと思うので、谷崎訳を全部次に示しておく。

恐らく一般に知られてゐないだらうと思はれるのは、六代目の伯爵が邸を取り上げようとした時に、新しい基礎工事のために地面を掘ると、一箇の大理石像の破片が、幾つも土中から出たことがあります。それらは大勢の考古学者に委ねられましたが、学者の説では、粉粉のかけらから推測し得る限りに於いて意見を立てれば、それは羅馬の半獣神の像の崩れたものらしい、若しさうでなければ「死」を寓意する像であるらしい、とのことでした。邸に住んでいる老人の一人か二人だけが、それらの破片から成り立つものが誰の像であるかを察しました。

猶附け加へて置かなければならないのは、伯爵夫人の死後間もなく、メルチェスターの副僧正 [Dean of Melchester] に依つて有り難いお説教が聞かれました。その題目はそれと指してはありませんでしたが、此の話の事件から

暗示されたものであることは云ふまでもありません。副僧正は単なる外形の美に迷うて肉の愛に溺れることの愚かさを力説し、さうして唯一の理性的な、道徳的な情愛の発生は、人間の内部の価値を土台とするものであることを示しました。私が以上にその伝記を述べたところの、やさしい、しかしながら何処か浅薄なところのある貴婦人の場合に於いては、疑ひもなく若いウィローズの男振りに対する感溺が、彼女を駆つて彼と結婚せしむるに至つた重なる感情であつたのです。それが一層慨かほしいと云ふ訳は、云ひ伝へに依ると、彼の美貌は彼の長所の最も小なる部分であつたらしいのです。人々の云ふところは凡べて、彼が確乎たる性情を持った、才智の秀れた、有為な人物であつたと云ふ推測を証拠立ててゐるのです。

ここにはウィローズの大理石像の破片をみてローマ時代の半獣神の像であると鑑定した考古学者のおかしさと、肉よりも理性”という、本当はみんなが心底からありがたがって聞きそうにもないお説教が述べられているわけではないかにも蛇足としかいいようがないのだが、なぜこれが付け足してあるのだろうか、いろいろと考えられそうである。

従来の比較文学的研究の建前からいうと、外国文学の影響を受けて生れた文学作品の研究は実証的に行わねばならぬ。それは作品相互の間になんらかの関係があつたことを明確につきとめねばならぬということを意味する。幸いにも『春琴抄』の場合には、前述のような佐藤春夫の評論がある。もしこれがどこかに埋もれてしまつて、発見されなければ単なる推測にすぎないとして葬られてしまう可能性もあろう。

もし佐藤春夫が谷崎潤一郎の告白を聞くことができずに、谷崎と親交のあつた佐藤一個人の推測として『春琴抄』はハーディの影響によって生れたと書いた場合はどうであろうか。実証性というからは、これも研究者自身の直観

でない以上、これも有力な証拠力をもつ資料として用いられるであろう。

ただし異論の可能性があるかもしれない。ところで、佐藤春夫は例の評論を書くために『春琴抄』が発表されてから二ヶ月後にその評論を書く必要上、はじめて精読したらしい。さらに稿本で再読している中に、六年前の中央公論新年号に掲載されていた『グリーブ家のバアバラの話』との影響関係を直観した。

その後、この直観の正しかったことを谷崎からじかに証し得たのである。とにかく、谷崎自身の証明はなくとも、佐藤の直観が正しいことには間違いはなかったわけである。

となると、直観だからという理由で、実証性がないといって斥けるばかりが能ではないといえる。思うに、戦後のわが国の比較文学者が影響研究をする場合、とぎすまされた直観力を働かせることにややもすれば臆病でありすぎはしなかったろうか。かと思えば、手当り次第に実証性という名のもとにこじついたりする傾向がみられる。はなはだしきは漱石がある作品の中で白足袋と書いたのは、メリメの作品の中に白靴下というのがでてきたからだというような愚にもつかぬものまで飛び出してくる。

佐藤春夫が谷崎の作品について直観したのは、彼の天分もさることながら、親友として谷崎をあらゆる面で知悉していたからである。要は「感ずる」ことと「知る」ことにつきる。

いまひとつ重要なことは、作家が作品の製作過程を秘匿する場合である。前述の佐藤の評論の例の如きは滅多にあるものではない。また作家が告白めかして書いたり、しゃべっていることにも虚偽が入り混じる場合がある。

その最もいい例は永井荷風の日記である。彼の日記は出版社の異るごとに、目立って相違があることは専門家のよく知るところである。

文学作品を書いている人とか、作家的素質の旺盛な人物は何を書いても、ふとフィクションじみたところが出てしまいうらしい。新聞記者出身の作家某が、記者時代にある事件をフィクションを混えて書いたため後で大騒動になったという挿話もまことしやかに語られているほどだ。

元来、作家は中々自分の作品の秘密を他人にはあかさないものである。書簡類や日記にすら虚構性があるとするならば、比較文学研究の上では重要な課題である影響の研究は宙に浮いてしまう。くだいようだが、この問題解決には直感力しかない。もう一度言うならば、*「感ずる」* 能力と、*「知る」* 結果の蓄積に頼らざるを得ない。

そこで『春琴抄』について、谷崎潤一郎が佐藤春夫に告白したこと以外に、何か秘匿されていないかを考えてみたい。

「日本人ならどうするだらうと仮定を進めてみたり、男と女とを取返へてみたりするうちにあんな風に来て来た……」と谷崎は言ったという。まさに、そのとおりであろう。恐らく谷崎はハーディの小説を熟読玩味の末翻訳したのであろう。前述の翻訳例をみても、よく判るはずである。

彼は現在私たちが *Explication de Texte* (原文味読法) といっている方法を自然にすっかりやってのけたのだ。「グリーブ家のバアバラの話」のような、陰翳の濃厚な作品は谷崎の体質に合うのである。もはや流行でないハーディの作品を谷崎流の読み方をした。

彼は「白鳥氏程熱心ではないが、近頃の私も全然西洋の物を顧みない訳ではない。折角習った英語だから、せめて此の外国語一つだけは忘れないやうにも思つて、ときどき漫然と読みちらしてみたりする。が、どう云ふものか近年英語の小説で巻を終へるまで興味を惹かれた例は殆んどない。」と書いている。（「正宗白鳥氏の批評を読んで」――

九三二年〔昭和七年〕『改造』七月号)この文章は「グリーブ家のバアバラの話」を翻訳して、五年目に書かれていたから、すくなくとも三〇年以後に、あのハーディの作品のように彼が関心をもった英語による小説はなかったことが判る。

ときどき漫然と読みちらすという読書態度のほうが、何かもの欲し気にせかせかした気持で、外国語の小説を読むよりも、どこか琴線にふれるところがあれば、ことさらに強く共鳴音を立てるはずである。

私見であるが、文学的影響には質的にみた場合、三つある。(一)模倣的影響、(二)共感的影響、(三)否定的影響である。(一)は作家の力が足りなくて、自分が感銘を受けた作品に引きずられて思わず類似の作品を書いてしまい、誰の目にもそれと判る場合。

(二)は作家の琴線にふれた外国の作家などの作品の味わいが永く脳裡に残っていて、醗酵し一種の化合物の如きすがたとして作品が生れてくる場合。

(三)はセルバンテスがヨーロッパ中の騎士道物語をやっつけるために『ドン・キホーテ』を書いたように、作家が嫌悪する作品に否定的態度を示す場合。

谷崎の告白の如く、彼自身がハーディの作品を読む中に何か感ずるところがあった。あるいは下火になったハーディの面白さを、作家の目で堀りおこしてみせるという意味をもこめて翻訳を発表したと考えられる。雑誌社では雑誌の新年号の企画を七、八月ごろにはするはずであるから、谷崎の翻訳も雑誌にでる数ヶ月前から準備がなされていたと考えるべきである。彼がかなり慎重にとり組んでいたことが、前書きをみてもよく判ろうというものである。訳文を書き読み返えしつつあれこれと考える。心中いろいろな波紋がえがかれる。そして人物その他、作品に必要な設定

をしていったに違いない。これを考えることは谷崎潤一郎という作家の魂の軌跡をたどることである。これが影響研究の基本であると思う。

谷崎の『春琴抄』とハーディの『グリーンブ家のバアバラの話』とを読み比べると、作中の人物についてまず次のように感ずることができる。

佐助の実家は主家の葉種問屋鴟屋よりは、はるか下級の葉屋で江州日野にあり、親子代々鴟屋に奉公した。そして、はじめから春琴に憧れの気持のあった、佐助は純真な田舎育ちで頑健な若者である。

ウィローズはやはり身分の低い田舎の青年で、美貌にして健康そのものである。はっきりとは書かれていないが、バーバラをしたっていたらしい。

春琴とバーバラはウィローズと佐助が性格的に相似するようには、相似形を画かない。ただし、自分の想いを我儘に通すところだけがややあい重なる。

ところが、アップランドタワーズ伯爵とバーバラを二つ足す、むしろ、この二人の性格を試験管にいれ化学的に処理することができたら、化合物として春琴ができてくるであろう。このような比喩が許されるのではないか。

春琴の底意地の悪さと我儘さなどからそのように言えそうである。

ウィローズは生存中と死後を通じて、バーバラとアップランドタワーズに相對するし、佐助は春琴の生存中はもちろん死後もずっとかの女に向い合っている。化合物としての春琴の主要分子はどちらかといえば、アップランドタワーズであるようだ。

彼はウィローズの死後も、これに嫉妬心を燃やして彼と對峙し、バーバラの死後も多分かの女の面影から脱し切れ

なかった。これも春琴死後の佐助と相重なる点である。

これを図解してみると、次のようになるであろう。

春 琴 ————— 佐 助

——— 化合

≡

U伯爵+バーバラ——ワイローズ

このような類似性とか相似性はいくらでも書き上げることができるが、数多く書き上げていく中に、滑稽なものも混ってくる。偶然の一致もあって、何が何やらさっぱり判らなくなり、実証性とやらがどこかにとんでしまいかねない。

しかし、前述の作中人物の対比は、谷崎が「男と女を取り替えてみた」としていることを根拠としている。表面的には盲目の女性春琴は大火傷で一眼を失ったワイローズの取り替えの如くにみえるが、主として伯爵の性格を春琴にあてたともとれないことはない。だが、谷崎の告白は余りにも簡単でありすぎる。

谷崎自身の告白といっても、佐藤の文章を通じてのことであるから、この重要なところがあっさりしすぎているのが気になるのである。ところが、佐助が針で黒眼を突いて自から盲目になる個所について、徳田秋声と杉山平助が不意な描写であると『文芸春秋』の座談会で難じたことに、佐藤は大いに谷崎を弁護し、佐助の失明の方法については、谷崎が専門家の意見を徴しているので正しいのだと詳細に述べている。

実は佐助の失明は、春琴ともども一つの転機をなした。これによって二人は、余人のうかがい知れぬ幸福の世界に入っていく。佐助は盲目以後にこそ、真に美貌の春琴を脳裡にえがき得た。

これに反して、ウィローズは一眼を失い、火傷によって幸福から見はなされる。また、バーバラは、無惨にも破壊されたウィローズの彫像を、拷問同様に見せつけられたことによって、脳裡に焼きついていた彼の姿が完全に消失してしまう。ウィローズの見えなくなったバーバラは不幸な世界に入ってしまった。この哀れな女は冷やかな夫アップランドタワーズの色欲充足の道具になり下がってしまう。それ以後のバーバラは以前のかの女とは違ったものとなるわけであるから、一つの転機である。

いとしい春琴がみえる盲目の佐助、盲目ではないのに、いとしいウィローズの像すら、見れなくなったバーバラ、この二つの人物はコントラストをなしている。

ハーデイの作品をじっくり考えている中に、谷崎の頭脳の中ではこのような人物像が自然にでき上っていったのだと思われる。

『グリーンブ家のバアバラの話』の結尾の部分は一見、蛇足のようにみえるが、谷崎は決して見逃さなかったように思う。この作品には風景描写もなく、ただ人物の行動と性格だけしかかかれていない。ことにウィローズの場合は美貌で純真な青年らしいことは判る。しかし、とりえはその男振りのよさだけのようにみえる。

ところが実際は、内面的にも美しい点を多々もっていた青年で、確乎たる性情、秀れた才智に恵まれていて、彼の美貌は長所の最も小なる部分であつたらしい。彼を知る人々の証言からそのことが判る。

しかし、バーバラに、そのような理解があつたかどうかは判然とせぬ。むしろかの女が結婚するに至つたのは、若きウィローズの美貌に感溺したからである。

副僧正も単なる外形の美に迷い、肉の愛に溺れるの愚を力説したという。この聖職者もウィローズの本来の長所を

本当に知っていたかどうかは判らない。

バーバラとウィロローズの出会いもはっきり書かれていないので、彼の性格的長所を作品の前段部分に挿しはさむ余地はなかった。もし挿入したとしたら、ごたごたしたものになり、心理描写を除いた、あのような叙述は困難になったであろう。

そこで結尾に簡潔にあのように付け足したと考えられる。

谷崎はこの点について、いささかも触れてはいない。『春琴抄』もとりわけこれという風景描写もないし、心理描写もなくて、純客観的態度がとられている。

彼は一九三四年（昭和九年）の『改造』六月号に、作家も年の若い時分には、会話のイキだとか、心理の解剖だとか、場面の描写だとかに巧緻を競ひ、さう云ふことに夢中になっているけれども、それでも折々、「一体己はこんな事をしてゐていゝのか、これが何の足しになるのか、これが芸術と云ふものなのか」と云ふやうな疑念が、ふと執筆の最中に脳裡をかすめることがある。と書いている。

これは『春琴抄』を書くときの態度であったはずである。そして佐助失明という重要な個所の心理描写の不足に対する予防線といおうか、純客観の書き方ではどうしても、あっけなくなってしまう欠点をいかにするか。このことは谷崎の一番考えこんだところであったと思う。

このとき彼はハーディの手法を応用することが自然にひらめいたのではなからうか。

だからこそ「察する所二十一年も孤独で生きてゐた間に在りし日の春琴とは全く違つた春琴を作り上げ愈々鮮かにその姿を見ていたであらう佐助が自ら眼を突いた話を天龍寺の峩山和尚が聞いて、転瞬の間に内外を断じ醜を美に回

した禅機を賞し達人の所為に庶幾^{ちか}しと云つたと云ふが読者諸賢は首肯せらるゝや否や」とこの物語を結んだ。

佐助の失明が悟りを得るきっかけであるなどと禅僧の賞め言葉をつけて、お前さん方どう思うかと設問の形をとるとはうまい手法である。

ハーディから学びとったにせよ、はるかに彼をしのぐものがあるではないか。ウィロウズの性格を作品の最後にもってきている、ハーディの手法はそれほどすぐれたものとは言えない。

谷崎も佐助の飛躍的な心理を作品の途中でいかに書こうとも不十分なものとなったであろう。そこで、無駄を廃して、途中をわざと空白にしておいて、最後に禅家の一語をもって読者に喝を入れるなどまことに心にくいやり方であると思う。

ことに義山和尚とは実在の人物である。天童寺管長になった橋本峨山（二八三五）がそれで『峨山禅師言行録』がある。文中の偈に類似のものが、この言行録の中にあるのかどうか、まだ調査していないので判らない。どこにあるかはさして重要ではないと思う。それよりもこの偈によって、佐助失明が十分に語られたことになるかどうかは別として、とにかく、神韻縹緲としていたことは事実である。

ポール・ヴァレリー (Paul Valéry 1871～1945) は *J'aime la majesté des souffrances humaines.* (私は人間の苦悩の尊厳を愛する) というヴィニー (Vigny) の詩句を考えたりしてはいけないうっている。 *souffrances humaines* には元来 *majesté* なんぞはなのだというのがその理由である。だから、この詩句は考えたりしてはいけなものである。それでいてこの詩句は美しいのだ。 *Souffrances humaines* と *majesté* の二つの言葉は見事な調和をなしているからである。 (Literature, 1930)

峨山和尚の偈と称せられるものは、私にはこのヴァレリーのいうヴィニーの詩句を思い出させる。概して、禅家の偈はまず調和のある美をもって人に迫る。

意味を考えさせるよりも、その神韻をもって人の心を打つからである。谷崎が成功したとすればこのような調和の美である。

谷崎はこの点について、ハーディとのかかわりを一言も告白していないが、佐藤はその重要性を指摘している。

(前記『文芸春秋』新年号)

もっとも、佐藤も結尾の偈がハーディの影響であると明言はしていないものの、楽屋ばなしを暴露したかっこうで、あの作がその結尾で大に振ふも当然の道理”などといっているのは少々くさい気がしてならない。

谷崎が本当のところはしかじかであると、告白したものの、それを佐藤が発表しないという約束があったのではないだろうか。二人の間でならそれぐらいのことはありそうである。こうした作家の隠された部分の発掘は幾度もいうように非常に困難である。

従来ならば、これは一種の推測として斥けられたであろう。だが「原文味読法」を徹底的にやればおのずから水解し、作家の告白などなくても納得のいくものになる。作品の周辺にいたずらに事実と称する資料を山積みし、これをいくつ羅列しても真実には迫り得ないであろう。それだけをもって科学的研究とか実証的研究とかいう愚はもうやめなければいけないと思う。

仮にその資料が事実であったとしても、その選択には主観がついて廻り、その資料と資料をつなぐには虚構といつなぎが必要となる。そして、その資料の背後まで見透す鑑識眼をもつことが必要である。

要は、感ずる”（天分）と、知る”（研究結果の堆積）ことによって、万人が納得できる成果を出すしかないのである。

幾何学の解法の如く正しき補助線は正しき証明につながる。影響研究の際の推測も正しき補助線である場合のみ価値あるものとなる。『春琴抄』に対する佐藤春夫の推測などはこれに相当する。これを無視しては、実証的とか科学的研究は生きてこない。

私はこのような態度を影響研究に応用することを声高らかに提言したのである。

私の研究体験から言うと、作家という存在は、自己の作品の成立過程の秘密はできるだけ秘匿しようとするが、過去の創作態度を否定し新しい方向に向おうとするときは案外真情を吐露するものである。

谷崎が『春琴抄』を発表する一年前の『改造』七月号（前述の題目で）に次のようにも書いている。

「ひとところは私も多くの青年と同じく西洋に心酔した時代もあつたが、その時分に書いた作品を今から読み返してみると、ほんとうに日本離れのしたものは一つもない。正直のところ、私はその時代の自分の作品が一番イヤだ。（中略）と云つて勿論、西洋の影響を受けことを有害無益と考へる訳ではないが、余人は知らず、自分の青年期の作品に関する限り、その影響の現はれ方が甚だうすつぺらで、軽率であつたのが気耻かしくてならない。」

この告白は甚だ納得のいくものである。彼の初期の作品においてつまり明治末年から大正前半にかけての彼は西歐の作家と深いかかわりあいをもちながら成長してきた。よくあげられる外国作家はポー（Edlgar Allan Poe 1809～

49) とかワイルド (Oscar Wilde 1854~1900) などである。そして『魔術師』や『柳湯事件』などにはポーの手法がみられるし、『秘密』『饒太郎』『法成寺物語』などにはワイルドの『サロメ』などのエッセンスを汲みとり、作品の中に巧みに結晶させている、などといわれる。

ところが、谷崎自身はワイルド風な耽美主義とかポールの怪奇趣味などといわれる作品を嫌っている。その理由は西洋に心酔する余りに、その影響を受けたようにみえても、四五、六才になって回顧してみると、影響の受けた方がうすっぺらで、なんとなく軽卒な感じであるというのだ。

このような反省は作家にとって本当のところはあまり他人に知られたくないのが普通である。これを敢えて公表するというのは、他に方向を見つけ出し、自信ができたときにほかならないので、この種の告白は信頼に値する。

観客がバタ臭くてダンディな役者に拍手を送っている最中に、当の役者が舞台上で開き直って、いままでの演技はだめです、次をござらんあれと見得をきるようなものであるからだ。

その証拠に彼はその『改造』七月号の同じ文章中に「私の近頃の一つの願ひは、封建時代の日本の女性の心理を、近代的解釈を施すことなく、昔のままに再現して、而も近代人の感情と理解に訴へるやうに描き出すことである。」と書いて一つの方向性を打ち出しているのだ。

これらの文章は前述の如く『春琴抄』成立の一年前である。ハーディの作品の翻訳以後五年、いろいろと工夫をこらしていた過程の心境である。このとき谷崎はレイモン・ラディゲの『ドルヂェル伯の舞踏会』(Raymond Radiguet 1903~23: Le Bal du Conte d'Orgel) によって多くを啓発されたとも述べているが、結局はそのような心理小説ではなく、一見反対に思える『春琴抄』を書くに至ったのである。そして、作後一年目の『春琴抄後語』(『改造』六月号)

では、心理の解剖などというのがいったい芸術なのかと反問し「私は春琴抄を書く時、いかなる形式を取つたらばほんたうらしい感じを与へることが出来るかの一事が、何よりも頭の中にあつた。そして結果は、作者としては最も横着な、やさしい方法を取ることに帰着した。春琴や佐助の心理が書いていないと云ふ批評に対しては、何故に心理を描く必要があるのか、あれで分つてゐるではないかと云ふ反問を呈したい」と述べてゐる。

これら一連の谷崎の文章はまさに魂の軌跡の表現である。彼はラディゲの『舞踏会』を読んで「成る程かう云ふ風に書けば書ける」と考え「いつかは仏蘭西風の心理小説と握手する時がありそうに思はれる」とも言っているのだが（前記『改造』七月号）『春琴抄』とは無関係に見える。しかし彼は三田村篤魚（一八七〇）の『大名生活の内秘』にひどく感心している。四六版一〇〇頁そこそこのこの書物の中の「伊賀の水月」を激賞し、荒木又右衛門時代の諸相を淡々たる筆致で「描く」のではなく「話し」てゐるといふ。そして、この仇討をめぐる動く侍、町人、若党、小者、女房の生活様式、言語動作までが、「自ら想像されるのであつて、此れ以上何も付け加へる必要はない。」と断言する。こうして、谷崎は百の心理解剖や性格描写や会話や場面の転換も、つまるところ何するものぞと思つたわけである。

彼は『饒舌録』（一九二七年）に、ジェームズ・ジョイス (James Joyce 1882~1941) は奇抜な作家だと書いてゐるが、五年後の『改造』七月号では、ジョイスの作品などは、日本でさわがれる以前にすでに『ユリシーズ』(Ulysses 1922) を手に入れていたが、難解なので読むのをあきらめたと正直に告白している。

谷崎のジョイス紹介は日本におけるジョイスという観点からすれば、ずいぶん早い発言である。だからといって彼の『出』(一九二八年)をいかにもジョイスの「意識の流れ」的な影響ではないかなどとほのめかしたりするのはこ

っけいな気がする。

谷崎は『ユリシーズ』そのものは、投げ出したかもしれないが、一九二九年『改造』二月号には土居光知の『ヂョイスのユリシーズ』が発表された。彼はこれによって概略的な知識を得たであろうことは想像に難くない。彼は時々刻々に変化流動する意識の流れ (Stream of Consciousness) を独白的に表現するためのいわゆる内的独白であることは理解したであろう。

ところが、実はそれをそのまま応用せずに読者の意識の流れを呼びさます方法をとったのではないだろうか。それは前述の『春琴抄後語』によく表現されていると思う。

私はこれを逆意識の流れと呼びたい。

文学的影響の問題を考えるときに、このようなことも考慮に入れるべきではないだろうか。一枚のガラス絵を反対側からすかし見るという方法もあり、このほうが美しく見えることもある。

影響を論ずるとき、従来はあまりにも相似形的に平面的に考えすぎはしなかったろうか。一考を要すると思う。いま一度言うと、谷崎はその作品の文体、文学的内容ともある時期には外国ことに西欧的なものを汲みとろうとするが、文学作品の基本をなす文体の如きは日本語で書く以上、日本の古典の活用ということになってくる。これも谷崎にだけ限ったことではないのだろう。

異国への憧憬を通じて祖国へ復帰する過程の経験は、自国にのみ立てこもっている場合の経験とは本質的に異なる。異国への憧憬の期間には祖国との熾烈な葛藤があるからである。

荷風、潤一郎にはこれがあった。彼ら以外の主要な作家にもなにがしか、このような現象があるのかもしれない。

しかし、憧憬する異国の文化を正確に理解するということになると、それは別問題である。谷崎にはアンドレ・ジイド (André Gide 1869～1951) にみられるような神という存在はなかった。

二人とも官能の作家とかわいわれ、異端性や享楽主義的体臭を強くもっていたが、谷崎の場合には神の観念がないから、官能の神化ということはあり得なかった。

西欧の作家の享楽主義は神を否定しなければなしとげられない。ここに谷崎が西欧的享楽主義に触れても、すっぱりそれにつかれない原因がある。影響のひずみなのである。

最後に『春琴抄』の特異な文体にふれて論じなければいけないのだが、ようやく紙数がつきたので、別の機会に論じたい。しかしハーディの作品からの影響は文体の上にはみとめられないといったほうがよいと思う。

以上論じたことは影響に関して体験的に感じたことから一、二の問題提起のつもりで書いたものである。すでに同じような主張を見ないでもないのだが、私なりの意見をぶつけて同学の人々の批判を抑ぎたい。

言わずもがなのことながら、谷崎とハーディの影響を論ずるだけならば、それは一つの研究資料でしかない。

『春琴抄』は一つの盲目と愛の物語である。もし頭脳を複眼的に働かせれば、このほかにもチャールズ・ディケンズの『炉辺のこおろぎ』(Charles Dickens 1812～1870: *The Cricket on the Hearth*, 1845)・スペインのベニート・ペレス・ガルドスの『マリマネーラ』(Benito Pérez Galdós 1840～1920: *Marianela*, 1878)・アンドレ・ジイドの『田園交響楽』(André Gide: *La Symphonie Pastorale*, 1919)があることが判ってくる。ジイドの作品はディケンズの『アメリカ雑記』(*American Notes* 1842)に比べてフランスブリッジマン (Laura Dewey Bridgman) と同じ盲目の

少女と関係があることも明白である。

この一〇〇年の間にこのように盲目と愛の物語——グリーンブ家のバーバラもその中に入れるとして——がいくつも文学作品としてあらわれたことは甚だ興味のある問題である。

そして各々の価値評価はどうなるのか、という問題も含めて文化論的に論じていって、はじめて影響研究が無駄なものではないといえるのではないだろうか。

といっても、二国間の文学作品の影響研究が空しいから、これを廃せというのではない。資料として価値あるものはもちろん尊重すべき研究成果なのである。

付記 本稿に書けなかった問題についてはいずれ稿を改めて書いてみたいと思う。

註(一) Macmillan and Co. Limited から一九二五年に *A group of Noble Dames* が出版されているので、あるいはこれではないかと思う。